

# 坂本遼「春」小考

— 雲雀のために —

はじめに

雲雀が小・中学校国語教科書の世界から姿を消して久しい。坂本遼の詩「春」は、雲雀（ひばり、ヒバリ）の登場する教材のなかで、一九五〇年度以降、小学校教材としても、とも長期にわたって採りあげられ、唯一小・中学校両方の教科書に載った教材でもあった。<sup>②</sup>今でも『おさるがふねをかきましたほか』（光村ライブラリー第十八巻。光村図書出版、二〇〇二年）、『繰り返し読みたい 日本の名詩一〇〇』（彩図社、二〇一〇年）などに収録されて入手可能であり、一定の評価を保っている作品と思われる。「春」に関する研究文献は現在ほとんど見かけず、どのように読まれているのか確認できない。しかし、かつての採録教科書の指導書や斎藤喜博氏の授業記録に示された読みには大きな問題点があり、その

問題点は検討されなまま今に引きつがれているように思われる。<sup>③</sup>

今 井 正之助

## 一、従来説 i の検討

春

坂本遼

おかんはたった一人

峠田のてっぺんで鋏くわにもたれ

大きな空に

小ちやいからだを

びよつくり浮うかして

空いっぱいになく雲雀ひばりの声を

じつと聞いているやろで

里の方で牛がないたら  
じっと余韻に耳をかたむけてるやろで

大きい 美しい

春がまわってくるたんびに

おかんの年がよるのが

目に見えるようで かなしい

おかんがみたい

右が詩の全文である（光村ライブラリー第十八巻による）。問題は「大きな空に／小ちやいからだを／びよっくり浮かして」が何を描いているのかである。

『中学校国語二年』学習指導資料（学校図書。刊年不記載。対象とする『中学校国語二年』〔国語88〕は一九七五～七七年度使用）の「学習のてびき」に、「大きな空に…浮かして」とはどんなようすが想像されるか、と問いかけ、次のように解答している。

峠田の稜線の上に浮き出している「おかん」の姿を遠く下から仰ぎ見た情景。空はどこまでも広い。「おかん」のからだは、たよりなく小さく見える。しかし「小っちゃい」「びよっくり」という語のひびきには、その小さい「おかん」が大きな自然の中にかにも似つかわしく収まっているのが感じられる。

『中学校国語二年』学習指導資料（学校図書。刊年不記載。対象の「国語813」は一九七八～八〇年度使用）の〔鑑賞〕も次のようにいう。

第一連に描かれた「峠田のてっぺん」に浮きあがった「おかん」（おかあさん）のシルエットは印象的である。（引用略）という三行が、くつきりとしたイメージを与える。「びよっくり」という擬態語も、山の高まり、空の大きさの中で、年とって小さくなった「おかん」の軽さ、たよりなさをよく表現している。

問題の三行は、「峠田のてっぺん」に浮きあがった「おかん」のシルエットだという。

さらに、この指導書の刊行とほぼ同時期に、斎藤喜博氏が精力的に「春」の授業実践をすすめていた。授業対象者、実施年月、公刊された授業記録の順に示す（丸付き数字は『わたしの授業』の収録順である）。

- ①宮城教育大学附属小学校三年、一九七五年一〇月二五日、斎藤喜博『わたしの授業 第一集』（一葉書房、一九七七年）
- ②宮城県松山中学校一年、一九七五年一〇月二四日、授業記録は①に同じ。
- ③青森県十和田市三本木中学校二年、一九七六年五月一四日、『同 第三集』（一九七七年）
- ④横浜市富士見中学校三年、一九七六年六月一日、『同 第三集』（一九七七年）

⑤都留文化大学三・四年生、一九七七年七月八日、『同第  
四集』（一九七八年）

ここでは、①の斎藤氏の発言を引くが、他の授業記録もほ  
ぼ同内容である。

誰が小ぢゃいの？（中略）なるほどね、年とって腰がま  
がっちゃったから、ちっちゃくなっちゃった：（中略）  
そうすると、峠田だから、おかんはこのへんにいるんだ  
ねえ。（板書をさしながら）それを峠の下からみると、  
おかんのうしろには大きな空がある。（中略）そうだねえ、  
下からみると、（中略）ちっちゃいからだが、ぴよつく  
りと空のほうに浮んでみえたっていうのね。

学校図書指導書と斎藤氏実践の相互の関係はわからない<sup>④</sup>  
が、両者が相まって、この詩の話者（語り手）の視点を問う  
ことが定着していったものと思われる。

大森修氏は、知人から斎藤氏の授業記録を紹介され、「い  
ずれの記録を見ても、斎藤氏自身が説明してしまっている」と  
いう感想を持ったと記している（『国語科発問の定石化』  
明治図書、一九八五年、八九頁）。この感想は直接的にはい  
ま問題にしている話者の視点に関わってのものではないが、  
右の引用からも斎藤氏の授業が説明的、誘導的であるという  
印象は否めない。しかし、授業の進め方は別にして、大森氏  
も同じように話者の視点を問うている。大森修氏の授業記録  
（新潟大学教育学部附属新潟小学校四年二組、一九八四年

一月二日）が『大森修国語教育著作集 第4巻』（明治図書、  
二〇〇五年）に載っている。（Tは教師、Cは児童。イは上  
から、口は横から、ハは下からの視点。）

T 話者がおかんを、イ、口、ハのどの方向から見  
ますか。

C 「大きな空に 小ぢゃいからだをひよつくり浮かし  
て」って書いてあるので、空は大きな空なので、一番  
大きく見えなくてはいけないので、ハだと考えます。

以上の説はいずれも、ふもとから峠田のてっぺんにいる母  
が空に浮かんでいるように見えたという。そのようなことが  
ありうるだろうかと思うが、現実レベルの詮索はおき、愛着  
ある相手のことを思い描くことしかできない場合、その強い  
思い（自分の分身）はどこに向かうだろうか。相手のいまい  
る空間に自分もともに身を置きたい、と願うのが常ではない  
か。従来説への強い疑念はここにある。

「おかんの年がよるのが／目に見えるようで」「おかんがみ  
たい」とは、「おかん」のすぐそばにいたい、という気持ち  
の直接的な表現である。

この詩の話者がなぜ「おかん」と離れたところにいるのか、  
具体的にはわからないが、年老いた「おかん」が「たった一  
人」で「歎」をふるっている、という光景は、話者と「おかん」  
を隔てた大きな要因が経済的な事情であったことを思わ  
せる。話者がいくつなのかわからないが「おかん」を「たっ

た一人」でそういう状態にしている、そんな自分に対するふがいなさ、もうしわけなさも「かなしい」にはこめられているだろう。話者が何らかの不義理を犯して、「おかん」のそば近くによることができない、というような事情があると思われぬ。峠田の下方から「小ちやいからだ」の「おかん」を遠く仰ぎみるのみというのは、いかにも不自然である。

「相手がいまどうしているかという想像（やろで）は、その相手の傍らでもに見聞きした記憶がもとになっている。自分が体験したことのない光景を思い描くことは、通常はないであろう。「空いっばいになく雲雀の声」を、話者（の分身）もともに「峠田のてっぺん」でじつと聞き、「里の方で牛がないたら」話者（の分身）も牛のなきごえの「余韻」に耳をかたむける。峠田の麓（下方）にいたのでは、雲雀の声も牛のなきごえも単なる推測になつてしまふ。話者が「おかん」とともに感じとつていてこそ、実際には会えないせつなさがかきまわり、「おかんがみたい」という痛切な叫びが生まれる。大森氏の授業記録（『大森修国語教育著作集 第4巻』一九七頁）に次の応答がある。

日野：僕は、あれ、イ・ロ・ハどれからも話者は見ていないと考えます。というのは、話者は思っているんですけど。だからつまり、おかん、おかんのことを思っているんだから、見て言っているのではないので、イでも口でもハでもないと思います。

大森・（前略）その通りなんです。思ってるんです。でも、思っているときでも、例えば話者が日野くんを思うときに、日野くんの後頭を思い出しているのか、それとも前の顔を思い出しているのか、ということを生先生は聞いてるんですね。いい分かった？

視点を問うこと自体は、その叙述・描写の性格を分析する上で重要なことである。しかし、話者（の分身）がおかんのそばにいたのであれば、話者がおかんをどの方向から見ているのか（前か後ろか横か）、この詩の表現からは確定しがたし、特定することにより意味はないだろう。

## 二、従來說 ii の検討

従來說 i と異なる解釈を示すのが、光村図書出版の指導書である。『小学新国語 五年上』（国語<sup>12</sup>）。使用年度一九七七～七九）を対象とする『学習指導書』（一九七八年）には、栗原一登氏による教材選定意図を示す一文が載り、詩人竹内てるよ氏の「春」についての発言を「優れた鑑賞の文と思う」と前置きして引用している。

子供は都会に働きに行つて、どここの街にいろのかしれない。おそらくは、裏町の狭い暗い部屋で、空腹のまま、都会の空に來た春を知つたのでありましょう。「おかんはたった一人、峠田のてっぺんで歛にもたれ」と、出て

きて、見慣れた母親の姿が、心の目に見えるのでしよう。「大きな空に小っちゃいからだをびょっくり浮かして」年老いて、ブリキかんのような背中をしている母親が、息子を働きに出した後、一人で畑仕事をしている様子が目に浮かんできます。

右の引用文だけでは従來說 i との違いはわからないが、後継の『国語 五上 銀河』（国語 509、使用年度一九八〇～八二。国語 519、一九八三～八五。国語 529、一九八六～八八。国語 541、一九八九～九二）は、「大きな空に 小っちゃいからだを びょっくり浮かして」を次のように説明している。

a 大きな空のために、おかんがいつそう小さく見える。今にも空にうかび上がってしまいそうだ。（国語 509 『学習指導書』八五頁。国語 519 『同』六六頁）

b 作者が田舎にいたときに峠田で見上げたおかんの姿だろうか、山の稜線の上におかんの体だけが小さく浮かぶようにばつんと見える。（国語 529 『学習指導書』七〇頁、国語 541 『同』七〇頁）

光村図書出版『学習指導書』はいずれも、従來說 i のような視点を直接問う指導法を示していない。その理由を推察できるのが、引用文 b である。「作者が田舎にいたときに峠田で見上げた」とあるから、話者とおかんが同じ空間（峠田）にいた時の光景という理解である。引用文 a はあいまいであるが、『国語 509・519』と『国語 529・541』二種類の指導書

の内容に大きな違いはないから、a も b と同様の認識に立っているであろう。これは従來說 i のように、峠田のてっぺんにいるおかんを話者が麓の方から見あげているという構図ではない。ではなぜ同じ場所において、「山の稜線の上におかんの体だけが小さく浮かぶように」見えるのであろうか。

そうした見え方の説明以上に問題なのは、おかんを見ている話者の心理である。指導書の別の箇所には次のようにある。

〔引用略・末尾の三行〕は悲痛な願いである。おかに会いたいのではなく、「おかんがみたい」というほどばしる声は、子供に説明してやってもよいことかもしれない。（国語 529・国語 541 とともに五九頁）

この読解に異論はない。それであればなおのこと、「悲痛な願い」「はとばしる声」の対象が「山の稜線の上に」「小さく浮かぶ」おかんの姿であつてよいだろうか。従來說 i について示した疑問がここでもわき起こる。

さらに右の引用の前には次の見解も示されていた。

子供たちは、「大きな空に／小っちゃいからだを／びょっくり浮かして」を雲雀の様子だと読み取ったりするが、峠田ということで、さえぎるものもない広々とした大きな空におかんのちっちゃな体をイメージする方が、たった一人のおかんの愁いを感じられることになる。

（国語 529・国語 541、五九頁）

「おかんの愁い」とある。おかんの心にも愁いはあつたで

あろうが、「びよつくり」という表現を選んだのは話者であるから、「愁い」はそのように見てとった話者の、おかんに対する感情のほずである。引用文b傍線部は「ぼつんと見える」という。「ぼつんと」は、「孤山こざん」（『日本国語大辞典』一）だけぼつんとある山。また、人里はなれたさびしい山）のように「孤」を関する熟語の訳語として用いられることが多い。「たった一人」と結びつきやすいことであろう。しかし、詩の表現は「びよつくり」である。辞書類には採られていないようであるが、「びよこつと」（『日本国語大辞典』はずみをつけて軽く動作するさまを表わす語。びよこんと）などが近いといえようか。学校図書指導書「国語808」は「びよつくり浮かして」を次のように解説する。

峠田の稜線上の空に、「おかん」の歎にもたれたシルエツトが浮かんでいようす。「びよつくり」という擬態語のひびきがあつて、小さく軽い、むしろかわいらしい感じになつている。（四二頁）

おかんへの思い（愁い）をこめた表現として、「びよつくり」はなじまない。雲雀の様子だという子供たちの読み取りに、もっと耳をかたむけるべきではなかったか。

### 三、詩碑のこと―遠い峠田のてっぺん―

兵庫県加東市の坂本遼の生家の近くに、次のように刻まれた詩碑が建つている。<sup>(7)</sup>

坂本遼

春

遠い峠田のてっぺん

あれは おかんかいな

鳥かいな

この詩について坂本遼の長男洋氏（一九三〇年二月生。注5年譜による）が次のように述べている。

昭和の初め、父が二十歳前後のころの作品だ。当時はまだ見渡すかぎり段々畑、そのはるか遠くの畑で野良仕事をしているおかん（方言で母のこと）の姿が鳥と見まらうくらい小さく見えたらしい。（注5引用『たんぽぽの詩』二四二頁）

近親者の発言は尊重すべきであるが、遼は一九〇四（明治三七）年九月生、一九二四（大正一三）年が満二〇歳で、いづれにせよ、洋氏の生まれる前のことであり、伝聞による記述である。『坂本遼作品集』（駒込書房、一九八一年）などにも詩碑の詩は見あたらない。

『たんぼの詩』に詩碑の詩に近い、「日の出」と題する詩が載る。末尾の括弧内は『たんぼの詩』に付された出典注記である。

朝はやく

峠田のてっぺんで

動いてゐる黒いものは

あらおかんかいな

鳥かいな

〔詩神〕6巻7号・昭和5年7月

昭和五年七月は洋氏が生まれて間もないころであり、先の洋氏の発言は右の「日の出」のことを指しているであろう。

詩碑の詩とまったく同じ直筆の書影(図版)が『現代日本詩人全集14』(東京創元社、一九五五年)に載る。同集には、他に岡崎清一郎、山之口猷、菊岡久利、大江満雄、藤原定、淵上毛錢の諸詩人の作品が収録されているが、「坂本遼」(活字)と銘打った頁(三四七頁)に手書きの「春 坂本遼」(詩三行略)が記されている。この全集シリーズは各詩人の収録頁の最初に、当該詩人直筆の書影を載せる(原稿用紙に詩を記したものが多く、葉書書面などもある)。同全集10(一九五四年二月刊)の「中野重治」には「今にたくさん  
の秀才が／これらすべてを理論づけようとして／必ず必ず苦しむだろう／一九五三年九月なかのしげはる」という図版がある。「今に…」は『中野重治詩集』(小山書店、一九四七年)収録の詩「為替相場」の一節であり、この図版は刊行前年の

九月に筆を執ったものであろう。坂本遼の図版も同様の経緯が考えられる。自筆原稿を求められて、前掲の「日の出」を抄出し、題名は「春」にあらためた。そのように考えた場合、詩碑の元になった自筆原稿は全集14刊行の前年一九五四年に書かれたのではなからうか。

さて、ここでは、詩碑の詩の成立年を特定するのが主目的ではない。『たんぼの詩』に「おかん」と題する詩が載る(改行箇所を「」で表示する)。

- 1／おかんの墓は／南をむいた山の／小っちゃい日溜り  
／花の咲くままに荒れはてて／たんぼの大きいのや  
／蓮華草などが／咲きみだれとる／もう あのおかんの肉  
はなくなり／骨だけが／さびしさうに／西の方をむいて
- 2／おかんは死んでもうた／おかん おらも死にたい  
／合掌しとるやろで
- 3／おかんが死ぬ前に／おら おかんに問ふた／「林檎  
のスープと梨のスープどつちよい」／おかんは言ふた  
「安い方がえ、」

〔学校〕7号・昭和4年10月

「年譜」によれば、一九二八(昭和三)年二月一七日に、遼の母みつが死去している。詩「おかん」は母の死の翌年に書かれ、さらにその翌一九三〇年に詩「日の出」が発表された。傍線部に示された死後のおかんのイメージを経て、「日

の出」のおかんは、「黒いもの」とも表現されている。まさにシルエットであるが、「おかんかいな／鳥かいな」とつづき、話者は麓から遠く峠田のてっぺんを見やっただまま、その場所に立ちつくしている。ここにはもはや「おかん」のもとに駆けよりたいという強い衝動は感じられない。

小稿で問題にしている、教科書採録の「春」は、母の生前の一九二七（昭和二）年五月に同人誌「先駆」創刊号に発表され、九月に「春」を収めた詩集『たんぼぼ』が銅鑼社から刊行された。教科書採録詩「春」と詩「おかん」詩「日の出」との間には、話者とおかんとの関係性に大きな断絶がある。詩碑の詩「春」は、元になったと思われる詩「日の出」に比べると「動いてゐる黒いものは」が削除されており、題も「春」となっているから、のどかな印象を受けるが、ここにも教科書採録詩「春」の母にまわりつくような感覚は無い。さらにいえば、詩「おかん」の「おらも死にたいわ」という激しい情動は消え、詩「日の出」よりもさらに静かに、遠く異世界の存在としておかんを見やっている。年月を経ておかんの死を受けいれている日常がある。その意味で詩碑の詩「春」は、詩「日の出」の単なる抄出ではなく、独立した新たな詩となっていると評せよう。

『国語学習指導書 5上 銀河』（光村図書出版、一九八九年。教科書番号「国語519」に対する指導書）七八頁に

なお、坂本遼には、もう一つ、同じ「春」という題の作

品がある。「峠田のてっぺん」にいるおかんの姿が表現されており、「鳥」にたとえられるほど小さな母をいつくしむ作者の心情が感じられる。

とあるが、右に述べてきたように、二つの「春」を同日には論じられない。<sup>⑩</sup>

#### 四、雲雀はどんな鳥か

これまでとは違った観点から検討をつづける。小学校教材として長く「春」を採りあげてきたのが光村図書出版の教科書である。『小学新国語 五年上』（国語514）の単元「表現を味わって読もう」は、「川」（谷川俊太郎）、「じんちようげの花」（峠兵太）、「春」を扱っていたが、『国語 5上 銀河』（以下「銀河」と略称）の単元「詩を読もう」は採録詩の構成を変えている。

『銀河』（国語509）… 虻（嶋岡晟）、若葉よ来年は海へゆく

う（金子光晴）、春、晴れ間（三木露風）、  
海雀（北原白秋）

『銀河』（国語519）… 虻、春、晴れ間、海雀

『銀河』（国語529・541）… 虻、春、われは草なり（高見順）、  
海雀

『銀河』から「海雀」が登場した。「虻」の第四連にも「岩燕の歌」という一節があり、教科書には「海雀」「岩燕」に



ついでに四〇字前後の脚注がある。『学習指導書』にも

詩「海雀」に入る前に、ウミスズメ（海雀）について、その特徴や生態について調べてみたいと思います。詩「海雀」のイメージを克明にするために、不可避のことだからです。（国語509『学習指導書』七八頁）

とことわって、詳細な説明がなされている。ところが、雲雀については身近な鳥だからという判断があったものか、教科書にも『学習指導書』にも何も記載がない。『銀河』（国語541）の『学習指導書』（一九八九年）は、「ウミスズメ」の説明のあとに、

ほかの詩にも、「岩燕」「雲雀」といった鳥が登場するが、余裕があれば図鑑などで調べ、目で確認をさせてみたい。（六三頁）

と補足しているが、この提言が実行されておれば、と惜しまれる。

雲雀の、他の鳥と異なる大きな特徴は、中空にとどまって（ホバリングしながら）さえずることである。

雲雀が空高く舞ひながら囀ることは、他の鳥と異なる著しい特徴で、（中略）空に数分間、うたひながら停止してゐる。（内田清之助『はあど るあ』「雲雀の話」東京出版、一九四七年）

ヒバリのもつとも顕著な特徴は、空に舞い上がりさえずることである。春、草原や農耕地の上空高くから聞こ

えてくるヒバリの声は季節の風物詩のひとつとなっている。（『日本動物大百科第4巻鳥類Ⅱ』平凡社、一九九七年。六九頁）

かつて使用された国語教科書の中からも、次のような例をひろうことができる。

「ひばり」（砂村秀治氏による書きおろしの説明文。東京書籍『新しい国語3上』などに、一九七一一七九年度にわたって載った）

ひばりが、空に上ったり、地上に下りたりするときには、ふつうの鳥と少しかわったとび方をします。ちょうどヘリコプターのように、まっすぐに上り下りすることができます。そして、空中にとどまっていることもできるのです。

空高く上って、いろいろな鳴き方でさえずるのは、おすのひばりです。草むらからとびたつたひばりは、ぐんぐん空に上りながら、「ピーチク、ピーチク」とくり返しさえずります。空に上ると、風のふいて来る方に向かってはばたきをしながら、つきつきに鳴き方をかえてさえずりつづけます。

「ひばりの子」（庄野潤三の小説『ザボンの花』の第一章。大修館書店『新中学校国語総合改訂版 一下』以下、三省堂、大日本図書、大阪書籍、学校図書、光村書店出版の中学校国語教科書に、合わせて一九五八―一九八〇年度にわたって

載った)

その声は、不意に正三の頭の真上で聞こえた。

それは、うれしくてたまらないような、本当にかわいらしい声であった。その声は、正三の頭の真上の空から、いきなり動きだしたぜんまいじかけのおもちゃの自動車か何かのように、勢いよく鳴りだしたのだ。(中略)

それは、たいへんせわしそうにさえずりながら、その声と全く同じくらしいのせわしさで、小さい羽を動かして、まるでやっどこさ空に引つかかっているというふうに見えた。<sup>(1)</sup>(光村図書出版『中等新国語 一』による)

雲雀の特徴を認識し、関連する記述をたどってくれば、「春」の問題の三行が、ホバリングしながら高らかに声をひびかせている雲雀の姿を描いたものであることは明らかであろう。詩の短い一節でありながら、光景を一筆で描ききって強い印象をあたえる。「ひばり」(砂村秀治)や「ひばりの子」(庄野潤三)の、文章による積み重ねにも匹敵する優れた表現であると考える。

おわりに

「春」の第一連を文章のかたちで表記すれば次のようになる。おかんはたった一人、峠田のてっぺんで鉄にもたれ、大きな空に小っちゃいからだをびよっくり浮かして、空

いっばいになく)雲雀の声をじつと聞いているやろで。

へ)内は雲雀の描写として過不足ないが、詩の分かち書きの中では長いように感じられることと、「鉄にもたれ」という連用形が次の動作を求めするために、「じつと聞いている」よりも手近な「びよっくり浮かして」までを「おかん」の動作と読んでしまうことになったのであろう。

さらに、従来の説には、年老いて腰が曲がり小っちゃくなつたおかん、という強い思い込みがあつたと思われるが、雲雀の扱いがぞんざいであつたこともその思い込みをただす機会を奪つていたといえよう。

注

(1) 今井「小・中学校国語教科書ひばり教材考——一九五〇年度以降の採録状況の概観を中心に——」(愛知教育大学大学院国語研究28、二〇二〇年三月)

(2) 光村図書出版『小学新国語 五年上』(教科書の記号・番号:国語5上)。使用年度:一九七七〜一九七九。以下、記号・番号:使用年度、と表示する。光村図書出版『国語 五上 銀河』(国語59:一九八〇〜一九八二。国語59:一九八三〜一九八五。国語59:一九八六〜一九八八。国語59:一九八九〜一九九二)。学校図書『中学校国語 二』(国語808:一九七五〜一九七七。国語

2833:一九七八―一九八〇)。記号・番号および使用年度は、公益財団法人教科書研究センター附属教科書図書館の「教科書目録情報データベース」によった。

(3) 阿部昇「斎藤喜博・詩の授業についての批判的検討―何を受け継ぎ、何を否定すべきなのか―」(教育方法学研究19、一九九四年三月)が斎藤氏の「春」の授業方法を検討している。しかし、《…空に体が浮いているように見えるためには、大空を背景に「おかん」の体が見えないといけないであろう。とすると、それは下から上を見上げないと成立しない形象である》(同論文一〇六頁)という箇所を示されるように、阿部氏の「春」の読みそのものは、斎藤氏と変わりない。

(4) 「ぴょっくり浮かして」が母親の様子だとする解釈は、竹内てるよ氏(一九五六年。第二節に引用)にはじまるようだが、竹内説ではどこから母親を見ているのかわからない。学校図書指導書や斎藤氏の読みは、それぞれ竹内説に触発され、その発展形として峠の「下から」の光景としたものかもしれない。

(5) 姫路文学館編・刊『たんぼの詩』(坂本遼作品選)(一九九九年)の「年譜」には、この詩の発表された遼二三歳の一九二七(昭和二)年三月、関西学院文学部英文科を卒業したが、「折しも金融恐慌で就職先はなく、故郷で母の農業を手伝う」とある。詩「春」はその五月

に『先駆』創刊号に発表されている。翌年一二月に母が亡くなる。「春」発表時、父は存命(一九三六年一月死去)であるが、「辺地教育に私財を投じて情熱を注ぎ、家庭を顧みるいとまがなく、代わって母が一家のきりもりをし農作業に励んだ」(「年譜」一九〇四年)ともいう。詩「春」には実体験の投影がみとめられるが、創作である。また、『たんぼ』は、全体を「おかん」と「おら」(主と呼ばれている)を軸とする物語のように読むこともできる。なかでも詩「お鶴の死と俺」は詩「春」と密接なつながりがある(注6竹内氏もそのことに触れる)が、ここでは作者の伝記的事実は持ちこまず、かつ、「春」一篇から読みとれることを問題にする。

(6) 竹内てるよ・神保光太郎『詩の本』(朝日新聞社、一九五六年)第一部6「生活の詩」。原文と引用文とは小異あるが、ここでは問題としない。

(7) 加東市観光協会HP他による。注5「年譜」によれば、一九七二年五月二三日建立。

(8) ただし、詩碑の「坂本遼」という署名の文字のみは、この全集の図版の署名とは異なる。署名の文字がどこから採られたのかは未調査であるが、より力強い印象を与える文字が選ばれたのであろう。

(9) 第一詩集『たんぼ』には、「春」(おかんはたつた一人…)のほかにも、「春」(みつちゃんど…)、「春」(指

をくはへて：と、同題の詩が載る。「春」は好みの詩題でもあったか。

(10) 詩集『たんぼぼ』に登場するおかん(母)は、詩「おかん腹おさへておくれ」「詩」だまってゐる心と心、「自序」(これも注5にいう物語の一環)に顕著なように、話者が肌身で感じとり、凝視する存在であつて、よそよそしく眺めやる対象ではない。

(11) 詩「春」の「浮かして」を母の状態とみなす説は、それを「浮かぶ」「浮かんでいる」と解釈している。しかし、「浮かす」は他動詞であり、母が自分で自分の体を浮かせていることになる。話者がなぜそのように見なすのか、さらに説明が必要となろう。「ぴよっくり浮かして」は、庄野の小説の傍線部が描くような雲雀の様子にこそ似つかわしい。

なお、光村図書出版『中等新国語 教師用指導書一上』に次のような注意がある。

冒頭の場面で、かえつたばかりのひばりの子が高く飛び上がつてさえずるといふのは実際にはあり得ず、都会育ちの正三がひばりの成鳥、少なくとも孵化後半年以上たつたものを、ひなと誤つたものである。しかし、それを「ひばりの子」と思いこんだことから、この事件は展開するので、「あれは、ひばりの子だ。」(P 43)という認識は、正三にとつて重

大なことだったのである。(一九七二年度版八一頁) 同指導書は庄野の「正三にとつて詩的、真実、だった」という言葉を引いた上で「ひばりの生態をよく知つている生徒のいる場合には補説することも必要であろう」と結んでいる。

(いまい・しょうのすけ 本学名誉教授)